

須賀川が生んだ栄光の銅メダリスト

つぶら

や

こう

きち

円

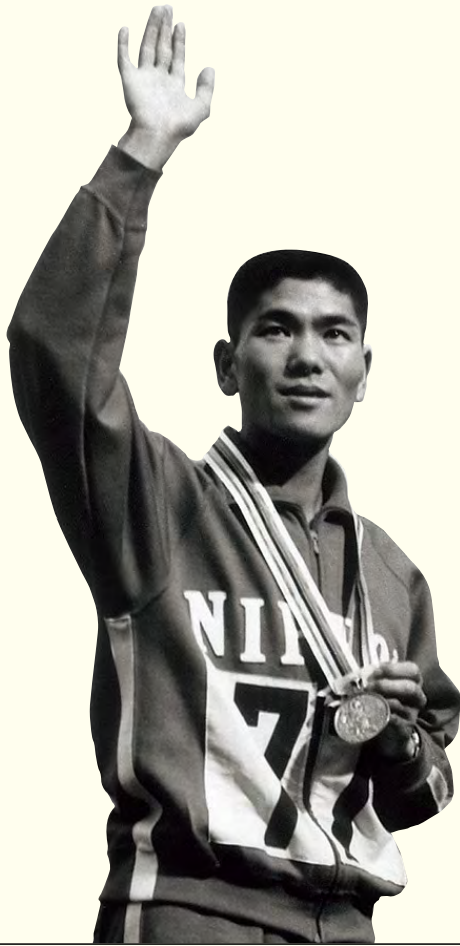
谷

幸

吉

PRIDE of SUKAGAWA





円谷幸吉 (つぶらや こうきち)

- | | | |
|--------------|--------|---|
| 1940年(昭和15年) | 5月 13日 | 福島県須賀川町(現須賀川市)に、父幸七、母ミツの六男、七番目の子として生まれる |
| 1947年(昭和22年) | 4月 | 須賀川町立第一小学校入学 |
| 1953年(昭和28年) | 4月 | 須賀川町立第一中学校入学 |
| 1956年(昭和31年) | 4月 | 県立須賀川高校機械科入学 |
| 1959年(昭和34年) | 3月 | 陸上自衛隊入隊、八戸教育隊での訓練の後、郡山駐屯部隊第六特科連隊第三大隊本部中隊に配属 |
| 1962年(昭和37年) | 4月 | 自衛隊体育学校(埼玉県朝霞市)に入学 |
| 1964年(昭和39年) | 10月 | 東京オリンピック陸上競技10000m6位入賞、マラソン3位銅メダル獲得 |
| 1967年(昭和42年) | 8月 | 椎間板ヘルニア、アキレス腱を手術(11月退院) |
| 1968年(昭和43年) | 1月 8日 | 死去(享年27歳) |



ポータン
(須賀川市 公式キャラクター)

たっくん

ゴール後のたっ君とポータン



- 「たっ君、マラソン大会優勝、おめでとう！」
 「ありがとう、初めてのマラソンだったんだけどね」
- 「ところでポータン、この円谷幸吉って誰？」
- 「東京オリンピックで大活躍した人だよ」
- 「東京オリンピックピクって2020の…？」
- 「それは2回目の大会で、1回目は1964年に開かれたんだよ」
- 「僕ぼくが生まれるだいぶ前のことだから、わからないよ」
- 「そうだよね。」
- この人は円谷幸吉（いちがや こうきち）さん。
- そのオリンピックピクのマラソンで、銅メダルをとった人で、たっ君と同じ須賀川一小に通っていたんだよ。
- マラソンの他にも、10000mで6位に入賞したんだよ」



「これまで、一つのオリンピックでマラソンと
10000mの両方に出場した日本人選手
は、こうきち幸吉選手しかいないんだよ」

【オリンピックマラソン競技円谷幸吉に続く日本人選手メダリスト】

男 子	
1964年 東京オリンピック	円谷 幸吉 (銅メダル) 2時間16分22秒
1968年 メキシコシティオリンピック	君原 健二 (銀メダル) 2時間23分31秒
1992年 バルセロナオリンピック	森下 広一 (銀メダル) 2時間13分45秒
女 子	
1992年 バルセロナオリンピック	有森 裕子 (銀メダル) 2時間32分49秒
1996年 アトランタオリンピック	有森 裕子 (銅メダル) 2時間28分39秒
2000年 シドニーオリンピック	高橋 尚子 (金メダル) 2時間23分14秒
2004年 アテネオリンピック	野口みずき (金メダル) 2時間26分20秒



「へえ、幸吉選手ってすごいんだね。」

ところでポーターン、この大会に、毎年招待選手で出場している、君原健二さんも銀メダルをとってるんだね」



「そうなんだ、君原選手は、東京オリンピック後、幸吉選手は、メキシコオリンピック前に27歳で亡くなったけれど、君原選手は、幸吉選手の分も頑張ってメダルをとったんだよ」



「幸吉選手が銅メダルをとったときは…どんなだったの？」



「陸上競技では、最終競技のマラソンまでメダルを一つも取れなくて、日本中の人々の期待が集まっていたんだ」

【東京オリンピック】

マラソン競技

1964年10月21日、国立競技場、気温18度、曇り、午後1時、幸吉は、日本全国の人々の期待を背負って、走り始めました。

沿道や国立競技場スタンドには須賀川から大勢の応援団が駆けつけていたのですが、その中には母校須賀川高校の応援団をはじめ、幸吉を見守る両親や親族の姿がありました。

レースはハイペース。幸吉は5キロ地点を、日本人トップの18位で通過しました。

20キロ地点では、1位がアベベ（エチオピア）で、幸吉は4位に順位を上げましたが、1分18秒の差

がついていました。

30キロ付近で、幸吉は軽い腹痛に見舞われましたが、35キロ地点でペースを上げ、ホーガン（アイルランド）を抜いて2位という素晴らしい順位で国立競技場に入ってきました。

すぐ後ろに、ヒートリー（イギリス）が迫っていましたが、観客



の「後ろだ、危ない」の声にも、
幸吉は振り向きませんでした。

最後の力を振り絞る幸吉を、
ヒートリーは一気に抜き去ったの
です。

幸吉は、3位でゴールに倒れ
こみましたが、この時半ば失神
状態だったといわれています。日
本陸上チームの織田幹雄総監督
は、幸吉が見せた極限の走りに涙
を流しました。まさに、低迷する
日本陸上競技界を救った快挙でし
た。

表彰式では、国立競技場の秋
空に日の丸がはためき、謙虚な
性格の幸吉は、少し照れながら観
客に手を振りました。最後まで後
ろを振り向かず諦めない幸吉の走

りは、日本国民に感動と勇気を
与えました。

後に、幸吉は、東京オリンピック
クマラソンについて

「スタート時からやる気十分で気
力が充実していた。恐ろしい
ランナーは誰一人として見当
たらなかった」
と振り返っています。



【マラソン結果】

優勝 アベベ(エチオピア)	2時間12分11秒
2位 ヒートリー (イギリス)	2時間16分19秒
3位 円谷幸吉(日本)	2時間16分22秒



「小さい頃の幸吉選手って、どんな子だったの？」

【1940年5月13日 円谷幸吉誕生】

幸吉は、円谷家7人兄妹の末っ子で、お兄さんやお姉さんにはすごく可愛がられて育ちました。

しかし、軍人だったお父さんは、幸吉を小さい頃から厳しくしつけ、時には、思い切り叱ることもありました。

そんな時は、お母さんが、どうして叱られたのかをよく言っていて聞かせていました。後に、幸吉は

「オリンピックでメダルをとれたのは、この両親の厳しいしつけがあったからです」

と感謝していました。

【父のしつけ】

「名前を呼ばれたら返事をする」

「ちゃんとあいさつをする」

「自分のものはちゃんと片付ける」

「自分のことは自分でする」





「やっぱり小学生の頃ころから走るの速かったんだね」



「いやいや、そんなに速くはなかったらしいよ。運動会の時、前に人がいても、後ろをきよろきよろ振り向ふいて走っていたのを、お父さんに叱しかられる位だったんだって。それからだって…前をしっかりと見て走るようになったのは…」



「なるほど、それで、オリンピックの時には後ろを振り向ふかなかったんだね」



【後ろを振り向ふくな】

「キョロキョロと後ろを見ながら走るのはみにくい。絶対ぜったいするな。」

振り返るのは自分に自信がないからだ。堂々どうどうとやって勝て」



「ちゃんと走り始めたのはいつからなんだろう？」
「走ることに興味きょうみをもったのは、高校2年生になっ
てからなんだよ」

【1956年須賀川高校機械科入学】

幸吉こうきちは、須賀川一中を卒業して須賀川高校機械科
に入学しました。

お父さんに言われて、小学4年から始めたそろば
んを続けるため、そろばん部に入部したのですが、
3か月後に、機械科の勉強には必要ないと思い、退たい
部ぶしました。

次に入った剣道部けんどうぶも、3か月で退部たいぶし、速記愛好
会に入りましたが、2年になる時にはやめていまし
た。

幸吉こうきちは、自分が本当にやりたい事が、分からな
かったみたいです。



【1957年 高校2年】

高校2年になった4月。

幸吉は、喜久造兄さんが友達と一緒に陸上の練習をしているのを見て、走ることに興味を持ち、お兄さん達と一緒に走り始めました。

しかし、走っていることは、お父さんには内緒でした。

お父さんは、走ることだけでは生活はできないと考えていたので、見つかると反対されると思ったからです。

それから半月後には、幸吉は、一人で練習をするようになっています。

幸吉の練習は、夕方、家の手伝いの風呂焚きをした後、お父さんがお風呂に入るのを確認して、家の目の前にあった川浴い^{そい}を走り、お父さんに見つからないように、家族みんなで夕食を食べる前に、戻ってくることを毎日繰り返していました。

しかし、ある時、夕食に遅れてしまい、お父さんの知るところとなりました。



お父さんは、幸吉が毎日一生懸命練習しているのを知って、「そんなに走りたいのなら、中途半端でやめるな、やるなら最後まで徹底的にやれ！」と走
ることを認めました。

幸吉が本格的に走り始めて一か月後には、市民マ
ラソン大会の高校の部で2位となり、走ることがま
すます楽しくなりました。

一人で練習するのが好きな幸吉でしたが、イン
ターハイ(全国高校総合体育大会)に出るためには、
陸上部に入らなければならぬのを知って、5月の
終わり頃に陸上部に入りました。



【幸吉と駅伝】

幸吉が初めて駅伝を走ったのは、高校2年の10月に開催された福島県縦断駅伝でした。

この大会には、もともと喜久造兄さんが6人の友達と一緒に出場する予定でしたが、突然一人が欠場することになり、幸吉は代わりに出場し、第5区を走りました。

結果は、第5区を走った選手の中で、最も速かったため、区間賞をとることができました。

代走のため、その時の賞状には欠場者の名前が書かれていましたが、仲間はお祝いしてくれました。

それから、いくつもの駅伝大会に出場しました。

特に、青森県から東京都まで走る東日本縦断駅伝大会では、福島県、埼玉県の代表として計7回出場し、区間記録を何回も塗り替えました。

幸吉は駅伝競走が一番好きで、

「駅伝競走には相手を抜く、相手に差をつけるという面白さがある」

と話しています。

【1958年 高校3年】

陸上部に入部しても、幸吉は、一人で黙々と厳しい練習を重ねました。そして、高校3年の夏には、5000mのインターハイ県予選で3位になり、全国大会に出場しました。

全国大会のレベルは高く、順位は後ろのほうでした。幸吉は、レースの途中に靴がぬげ、裸足のまま走り続けることになりました。

それでも自己ベストを記録したのですが、全国との実力の差を痛感したのです。

この時、幸吉は、喜久造兄さんに

「全国大会ではとても悔しい思いをした。いつかは優勝を争える選手になりたい」と言ったそうです。



「それじゃあ、高校を卒業してからも陸上を続けたいんだ」

「そうじゃなかったみたいだよ。幸吉選手は、陸上を続けるために、実業団(陸上部のある会社)



に入りたかったんだけど、県大会3位の成績では、どこにも入ることができず、高校で学んだことを生かしたいと思い、自衛隊に入ることを選んだんだ」

【1959年陸上自衛隊入隊】

高校時代に、陸上で優秀な成績を残した人達は、大学や実業団に入って練習を続けましたが、幸吉の成績では、その思いは叶いませんでした。

自衛隊に入った幸吉は、3か月間、青森で団体生活を体験しますが、その生活の中で、厳しい訓練を受けました。この時、幸吉は

「両親のしつけのおかげで、団体生活や厳しい訓練も、なんでも素直にできたので苦にならなかった」

と話しています。

幸吉は、青森県での厳しい訓練を終え、郡山市にある自衛隊に配属されたのですが、ここでも一人で練習を始めます。



「自衛隊に陸上部はなかったの？」

「幸吉選手が配属されたときには、陸上部がなかったんだ。後に、斉藤章司先輩に声をかけられて、二人で陸上部を始めたんだよ」

【自衛隊での練習】

幸吉が一人で縄跳びをしているところに、野球部の練習を終えて通りかかった斉藤先輩が「何の練習をしているのか？」と声をかけます。

「マラソンの練習です」と答えた幸吉に、斉藤先輩が「一緒に練習してやるよ」と言った一言で陸上部の歴史が始まったのです。これは東京オリンピックまであと5年の秋のことでした。

なお、今でも陸上部は存続しており、部員は『第二の円谷』を目指し日々練習に励んでいます。





幸吉と斉藤先輩の練習は、とても厳しいものでしたが、幸吉は

「仕事で疲れたと思っても、ランニングシューズを履いて走り出すと足が軽くなる。これもランニングの魅力の一つ」と話しています。

次第に、陸上部には、幸吉の真面目で責任感が強く、素直な人柄に魅かれた人たちが集まってきました。



【入隊後の記録】

1960年 熊本国民体育大会
5000m 5位(15分0秒)

1961年 日本陸上選手権大会
5000m 6位(14分59秒)

1961年 秋田国民体育大会
5000m 2位(14分54秒)

1961年 東日本縦断駅伝大会
3区間で区間新記録 計15人抜き

幸吉は、短距離選手との練習の機会も得ることができ、持久力だけでなく、スピードも急激にアップしました。

なんと1年間で、1000mのタイムを、「13秒1」から「12秒3」にまで上げたのです。

陸上部で練習を始めてから3年後には、福島県代表選手として、秋田国民体育大会で2位、東日本縦断駅伝大会では、3つの区間で新記録をつくるなど、幸吉の名前は、全国に知られるようになります。高校3年の時の目標に近づいていました。



「陸上部でみんなと一緒に練習したのがよ
かったんだね」



「そうだね。そして、みんなのために頑張る
幸吉選手の人柄を表すエピソードも陸上部
には残ってるんだよ」

【陸上部での幸吉】

1960年12月に、陸上部のみんなと全国
自衛隊対抗駅伝大会に出場した時のこと
です。

幸吉は、1区を走り、トップでたすきをつ
なぐことを期待されましたが、4位でたすき
をつなぐ結果となってしまいました。

責任感の強い幸吉は、みんなの期待どおり
りに走れなかったことをくやしがり、走り終
わってすぐに頭を坊主にして、みんなに謝り
ました。そして、来年はベストを尽くすこと
を誓いました。



翌年よくとしは、大会の4日前しよくちゆうどくに食中毒しょくちゆうどくにかかり入院こういんしてしまいました。

幸吉こうきちは、みんなに迷惑めいわくをかけたくないと思おもい、無理矢理退院たいいんして、最終区間さいしゆうくわんを走りまました。

その時の走はりは見事けんじで、陸上部りくじょうぶのみんなはとても感動かんとくしていたそうです。



「幸吉選手こうきちせんしゅは、自衛隊じえいたいに入って4年目しよんめには、オリンピック選手せんしゅを育てるための自衛隊体育学校じえいたいたいふくがくに推薦すいせんで入ることことができたんだ。ここからオリンピックへの道みちが始はまったんだよ」



【1962年 自衛隊体育学校入学】

自衛隊体育学校では、1936年ベルリンオリンピック陸上競技で、日本代表の村社講平コーチに指導を受けるなど、とても充実した練習をしていました。

幸吉は、その時の状況を「自衛隊陸上部にいた頃の倍以上の練習をするようになったことで、スタミナに自信がついた」と話しています。

さらに、ニュージーランドでの練習が刺激となって、以前にも増して、積極的に練習に取り組むようになりました。

練習方法も自分で研究し、良いと思ったことは、自ら進んで取り入れるようになりました。

その時の様子を、畠野洋夫コーチは

「幸吉選手は、どんなにいい記録をだしても、『まだこれではダメだ』と、謙虚な態度で、私以外の人に指導されたことでも素直に聞いて、良いと思ったことはとことん練習して自分のものにしていった」と話しています。



「実は、こうきち幸吉選手は、最初からマラソンに出場することは考えていなかったんだ。

10000mの記録を伸ばすためにマラソンを走ってみようと思ったんだよ」



「先に10000mでのオリンピック出場が決まったんだね。でも、マラソンはどうだったの？」

【長距離競走の主な記録】

1962年 日本陸上選手権大会
5000m 優勝(14分20秒大会新)
10000m 優勝(29分59秒大会新)

1963年 オリンピック候補記録会
10000m 3位(29分13秒日本新)

東京オリンピック出場決定

1964年 東京オリンピック
10000m 6位(28分59秒)

【1964年初マラソンから世界へ】

幸吉は、10000mの記録を更新するために、それ以上の距離を走れば結果がでるのではないかと思ひ、東京オリンピック開催の年に、初めてのマラソン、名古屋中日マラソンに挑戦しました。

その時の幸吉は、大会の20日前まで足を痛めていて、走ることができないほどコンディションが悪く状態にもかかわらず、5位という素晴らしい成績を残しました。

しかし、この成績では満足できない幸吉は、コンディションが良い状態なら、記録はもっとよくなるのではないかと思ひ、なんと初マラソンから23日後に、2回目のマラソンとなる毎日マラソンに出場しました。

この大会は、オリンピック代表選手の選考会でもあったので、君原選手をはじめ、多くの実力のある選手が出場していました。

幸吉は、この大会のためにコンディションを整え、自分のスピードで、走れるところまで走ってみようと思ひました。





スタートしてから、30キロ地点を通過した時に、まだ疲れもなく走りに余裕があったので、途中でやめるのは惜しいと思い、走り続けました。

34キロ地点で、君原選手にリードされ2位となっても、自分のペースを崩さず、2位の成績でオリンピック出場を決めました。幸吉は

「マラソンという競技はコンディションを整えて、一生懸命に取り組んでいけば、自分が思った以上の力が出せると思う」

と話しています。そして、マラソンでのオリンピック出場が決まってからは、本格的にマラソンの練習にも取り組みました。

マラソンを始めてからたった2回目でオリンピックへの出場を決めたのもすごいことですが、もっとすごいことなのは自己最高のタイムを記録して、銅メダルを取るといふ快挙を成し遂げたことです。

後に、幸吉は

「オリンピックという夢に見ていた場面に立てたこ



【マラソンの主な記録】

1964年3月 中日名古屋マラソン
5位(2時間23分31秒)

1964年4月 毎日マラソン
2位(2時間18分20秒)

東京オリンピック出場決定

1964年8月 北海タイムスマラソン
2位(2時間19分50秒)

1964年10月 東京オリンピックマラソン
3位(2時間16分22秒)

とは、苦しかったけどやりがいがあった。
(マラソンの)前半は、日本中の皆さんの心強い応援があったおかげでのびのび走れた。後半はバテたけど、(応援のおかげで)一人で走っているのではなく、(皆さんが)背中を押してくれた感じがした」
と話しています。

この時、幸吉の他に自己最高の記録を出した選手は、優勝したアベ選手だけでした。このことは、大舞台でいかに自分の力を出し切ることが難しいかを物語っています。



幸吉は、色紙にいつも「忍耐」の二文字を書いた。



「本当に、幸吉選手はすごい人なんだね。僕も幸吉選手みたいになれるかな？」

「幸吉選手は走ることが好きで、『最後まで速くなりたい』という気持ちを持ち続け、常にみんなより努力し、その積み重ねが銅メダルというすばらしい記録につながったんだと思う。たっ君も幸吉選手と同じ気持ちを持ち続ければ、幸吉選手みたいになれると思うよ」

【円谷幸吉と走ること】

幸吉は、高校2年の時に走ることに出会ってから、走ることが好きで、常に走ることを楽しんでいました。時には苦しい

時もありました。そんな時、幸吉は、「忍耐」の二文字を胸に、その苦しさを乗り越え、自分の力にして結果を出してきました。

まっすぐに前を向き、常に力を出し切る誠実なその姿は、彼の生き方そのものでした。幸吉はそうした走り、家族や出会った多くの人達との絆の中から学びました。

父の教えを守ること、国民の期待に応えること、そして支えてくれた人々たちへの感謝の思いを最後まで持ち続け、瞬く間にその名を世界中にとどろかせ、27年の生涯を駆け抜けていきました。

円谷幸吉 メモリアルホール



1964年の東京オリンピックマラソン競技で、陸上競技唯一のメダルを獲得した円谷幸吉選手。その思い出の数々は、ご家族によって「円谷幸吉記念館」として長い間公開されてきました。

その後、須賀川市が円谷家の意思を受け継ぎ、幸吉選手の偉業を後世に伝えるため「円谷幸吉メモリアルホール」を開設しました。

オリンピックで着用したユニフォームやシューズ、獲得した銅メダルなどの貴重な資料とともに、歴史に残る名ランナーの軌跡を紹介しています。

- 入場料: 無料
- 開館時間: 9:00 ~ 17:00
- 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日) / 年末年始(12/29 ~ 1/3)
- 問合せ先: (公財)須賀川市スポーツ振興協会 ☎0248-76-8111

円谷幸吉 メモリアルパーク

須賀川市大町にあるこの公園は、円谷幸吉の生誕地のほど近くにあり、足型や写真が入ったモニュメント、座右の銘である「忍耐」の石碑などがあります。

令和3年3月27日に行われた東京2020オリンピック聖火リレーのトーチキスポイントにもなりました。



円谷幸吉 メモリアルマラソン大会

円谷幸吉の偉業をたたえ、第二の円谷育成を目指して、昭和58年(1983年)から始まったマラソン大会です。毎年10月第3日曜日に日本陸上競技連盟公認大会として開催。ハーフ・10km・5kmの部は、日本陸上競技連盟公認コースとなっています。



TOKYO
OLYMPIC
1964



77

TSUBURAYA KOKICHI
BRONZE MEDALIST



監修／円谷喜久造

絵／水野ぶりん (構成／竹治政枝)

●ホームページでも紹介しています



2023.05

非売品